

イギリスのコミュニティ研究見聞雑記

清水由文

私は一九八九年四月から六ヵ月間イギリスで「日英のコミュニティの比較研究」というテーマで研修することになったが、加藤秀俊氏による「見物の精神」つまり「風景あれ、物事あれ、ものをそのままの姿で直接体験する」という立場でイギリスを車でかけ巡るという生活を中心であつたので、イギリスのコミュニティ研究自体を深く追究していないことを最初におことわりしておきたい。

そこでなぜ研修先としてイギリスを選んだかに関して、故余田先生、故喜多野先生の影響があった。余田先生は、日頃から社会学も資本主義の先進地帯であるヨーロッパを調査する必要があるとよくいっておられたし、喜多野先生も、ファースなどのイギリスの社会人類学の研究成果などを研究、講義に取り入れられておられたのである。また、近年日本ではイギリスのコミュニティ研究が全く紹介されていないし、研究がなされていないこともその理由の一つであった。それで、研修先をイギリスにしたのであるが、大学の決定に際して、まずイギリスの大学名簿をみてみた。最初から有名なオックスブリッジやロンドン大学は除外して、受け入れ条件のよいと思われる地方の大学へ行きたいと思っていたのであるが、幸いウェールズのスウォンジー大学に懐かしいウイリアムズという名前を発見した。かれは、『イギリス村落の社会学（一九五六）』のゴスフォース村

研究で有名であり、日本でも当時松本通晴先生、二宮哲雄先生、執行風先生らが少しゴスフォースのコミュニティ、家族、親族などを紹介している。ウイリアムズは、その本を二七歳という若い頃に出版しており、その後、どういう研究をしておられるかが、日本ではつかめなかつた方である。

そこで、私は、イギリスへ出発の三ヵ月前に彼に手紙を書いたのである。そうすると、すぐに返事が来て Visiting Scholar として受け入れるという返事で、出来るだけの協力をしたいと書かれていた。

私は、三月一六日日本を出発した。私の滞在地スウォンジーは、ロンドンから三三五キロのところにあり、イギリスの新幹線であるインター・シティ（時速自称一二五マイル＝二〇〇キロ）で三時間の人口二〇万人のこじんまりしたウェールズ第二の都市である。ロンドンのパディントン駅を出発して、途中、レディング、スウィンドン、ブリストルをとおつて、ウェールズ地方にはいると、駅の名前がウェールズ語と英語の両方の表示になり、ウェールズに来たという実感がわいた。

私の所属したスウォンジー大学は、一九二〇年開校された大学で、正式にはウェールズ大学スウォンジー・カレッジであるが、ウェールズ大学はスウォンジー大学を含めて六つのカレッジから構成されている。この大学は、医学部こそないが自然科学、人文科学、社会科学の専門学科を持つ総合大学である。私の所属した社会学・社会人類学科は、一九六四年社会科学の発展のためつくられた経済学・社会科学部に属している。スタッフは、ウイリアムズ教授が学科長で、家族社会学で有名なハリス教授（正岡・藤見訳『家族動態の理

論』がある)、一人の上級講師と八人の講師から構成されているが、イギリスの他の大学と比較してもスタッフに遜色がないものといえよう。大学は、市の中心部から車で一〇分ぐらいの海に面したところにあり、大学のキャンパスの裏にシングルトン公園があり、私は、この大学の素晴らしい環境に大いに気に入ったのであった。大学の開講科目をみておくと、一年次は、どちらかといえば、一般科目がなんんでいるが、二年次からとる社会学コースの専門科目には、①社会学理論入門、②産業社会I、③産業社会II、④社会学理論、⑤社会学研究法、⑥産業社会学、労働市場の社会学、⑦科学と技術の社会学、医療社会学、⑧逸脱論、呪術・異端・逸脱、⑨コミュニティ研究と人種関係、都市社会学、⑩福祉社会学、⑪ジエンダー論、⑫アメリカのマイノリティ研究の科目が配置されている。そして、例えれば、ある社会学コースでは二年間に、①から⑤までのなかから三科目、その他五科目選択しなければならないことになっている。

私は、大学にいってすぐにウイリアムズ教授とハリス教授に挨拶にいった。両教授とも親切で良い先生であり、ハリス教授には、大學を案内していただきたいし、ウイリアムズ教授には、図書館などを案内していただいた。また受け入れに関しても、ウイリアムズ教授は、私に一つ研究室を提供してくれたし、スタッフと同等の扱いをしていていただいたことも、この大学を選んでよかったですとつくづく思つた次第である。最初に、両先生には、滞在が短期間であるので、特定の研究をここでするのではなく、自由にさせて欲しい旨をいって了解していただいたのである。

ここでは、コミュニティ研究に関するウイリアムズ教授のことを取り上げておこう。彼は、一九二六年生まれで、ウェールズの

アベリストウイス大学の地理学・人類学科で、B.A. と M.A. の学位をえて、一九五二年にキール大学に赴任し、その講師、上級講師をへて、スウォンジー大学に一九六三年に教授で着任し、すぐ初代の経済・社会科学部の学部長に就任している。彼は、アベリストウイス大学で、『ウェールズ農村地域の生活』で有名なりース教授に指導してもらっているが、そこで修士論文が『イギリス村落の社会学』として一九五六六年に出版されている。リース教授の四人の他の弟子たちは、同じウェールズ地域を調査し、それを修士論文、博士論文にして提出し、それらは、リース教授の編集で、『ウェールズの農村コミュニティ』として一九六〇年に出版されている。その当時ウェールズ地域では、コミュニティ研究のメカとみてよいほど、コミュニティ研究が活発に行われていた。しかし、ウイリアムズ教授は、ウェールズを調査地とせずに、北イングランドのゴースフォースを調査地として選定したのである。その理由として、その一つに、イングランドの典型的農村を調査したかったこと、二つめに、彼の奥方がゴースフォースで小学校の先生をしていたことをあげられたのであるが、それは非常に興味深い話であった。ゴースフォース研究は、イギリスの社会人類学的立場から、土地、家族、親族などをとおして全体の社会構造をとらえようとしたモノグラフで、それは、今日のコミュニティ研究の古典でしかも必読書であるといつてよい。ゴースフォースは、現在、その隣に核再処理工場があるが、それは、一九八三年の原子炉排水漏れで社会問題になつたセラフードである。セラフードを遠くからみれば、異様な建物がそびえており、そこに不気味なものがいるという感じがした。一応そこまで行き原子力施設を見学したいと思ったが、時間の都合がつかず

断念せざるをえなかつた。その後ゴスフォース村は、この核燃料施設により大きな社会変動を経験することになるのである。

それ以降ウイリアムズ教授は、一九五八年に『田舎の職人』を、

一九六三年に『西部地域の村落ーアッシュワーリー』をそれぞれ出版されている。その後、コミュニティに関する論文があまり見当たらないので、私は、彼になぜコミュニティ研究を止めたのかということを執拗に聞いたのであるが、それに対して、彼はコミュニティ研究を止めたのではないが、一九七〇年以降、医療社会学の流行とともに医療社会学に足を踏み入れることになったという。そして、一九七〇年に医療社会学調査センターを設立、一九八〇年には、ヘルスケア研究所を組織し、その所長に就任している。したがって、彼は、コミュニティと医療の二つを研究しているのだといって、このような二つの領域を研究しているのは、私だけではないと強調しておられた。

イギリスのコミュニティ研究は、一九五〇年から一九六〇年にかけてが、黄金時代であり、それ以降コミュニティ研究が衰退してきたのであるが、レスター大学のスコットは、「コミュニティは死んだ、コミュニティ研究は神話である。」と断言するほどである。その理由をウイリアムズ教授に聞くと、彼は簡単に、たんに社会学の流行をあげイギリス社会学でコミュニティ研究がファッショナブルでなくなつたという。そして彼の研究方向もそれに沿つているよう見えるが、彼は、コミュニティ研究を講義しているし、コミュニティ研究は、ウォンジー大学では、社会学と社会人類学の橋渡として位置づけられており、現在でも重要な研究領域と見なされていることは確かである。そして、研究スタッフもその認識に基づい

て研究しているようである。しかし、コミュニティは、イギリス社会学では、なぜか人気がなく、それは日本の農村社会学と同じ状況なのであろうか。

そして、コミュニティ研究は、一九八〇年代に社会人類学により再生されることになるのだが、それは、現在エディンバラ大学のコーン教授を代表とするグループによるものであるが、別の機会（桃山学院大学『社会学論集』二四一）にふれたので、ここでは割愛させていただく。私は、社会学におけるコミュニティ研究の衰退が単に社会学の流行性だけから説明できないと思い、それを文献にたどる必要があると思ったのである。そこで、図書館通いがはじまるのであり、ウイリアムズ教授に文献紹介をしていただいたり、自分で文献を収集する作業をしたのである。しかし、時間が充分でなく、単に文献資料の収集にとどまつたことは残念であった。

一方で、以上のようなことをしながら、他方では、見物の精神を發揮してあちこちのコミュニティへ行くことにした。最初は、どこか適当なコミュニティで実態調査をしようと思っていたが、短期間であつたので、それを諦め、これまでに先駆的研究者が調査したコミュニティを見学することにした。

まず、イギリスのコミュニティ研究の発祥地であるアイルランドへ行き、アレンスバーカとキンボールの調査地クレア県へいった。アイルランドのコミュニティ研究は、それ以降あまり活発に行われていないのであるが、今後もっと研究される必要があるものと思われる。さらに、ウェールズでは、リースのランフィンハングル、「イギリスにおけるコミュニティ」で有名なランケンバーグのグリンケーリオック村、ウェールズの西海岸沿いの調査地をまわつた。

スランフィンハンゲルでは、一軒の家で少し話を聞くために訪ねると、見知らぬ私を歓迎してくださって、コーヒーとケーキを御馳走していただいた時には嬉しかった。その時期は八月であったが肌寒い日で、それで身体が温まつたのである。さらに、ウイリアムズ教授のゴスフォース村、西南イングランドのアシュワーシイ村（実名ノースロー）、ブケットによる西南イングランドのハートランド村、ケンブリッジに近いストラーザンによるエルムドン村など合計一四の村落や小さい町のコミュニティなどを探訪したことになる。ただ回っただけにすぎないが、どこのコミュニティもそれぞれ違いはあるものの、成るほどと思わせるものが私に伝わってくるのである。とくに、エルムドン村、グリンケーリオック村、アシュワーシイ村、ハートランド村は印象深い村であり、もし機会があれば、調査してみたい村であった。しかし、新しいコミュニティ研究のメッカといわれるスコットランドのシェトランド島、バラ島、ハリス島、ルイス島、オークニ島などに行けなかつたのが返す返す残念であった。今度機会があれば、是非行ってみたい所である。

以上、すべて私のイギリスでの生活は試行錯誤ばかりであったが、いま振り返ってみると、ウイリアムズ教授、ハリス教授を始めいろんな方の協力をえて上手くいったような気がするのである。これからは、収集してきた文献の整理と今後なんらかの機会があれば、イギリスで調査をしてみたいと思っている次第である。